

絵は時代の証し

上原 誠勇



こんな時期に筆をとるのは何んとも気が重い。できれば景気も良くなり、バンバン絵が売れる時に書きたいものだ。

と言うのも昨年のバブル経済崩壊のあとは株や地価の下落や消費経済の不振と同様美術の世界も不景気風が吹いている。

あれ程にぎわっていた東京銀座の画廊街も肩を落した店主の後姿を見るばかり、私の知っている画廊も数社閉店におい込まれた。専門の美術情報誌を見てもあまりいい話題は見あたらない。

この美術市場の冷え込みは今では日本だけではないようだ。専門誌のニュースを見るとニューヨークやロンドン、パリの国際市

場も大変な不景気に陥っているという。

美術と経済、あまり関係がないように思えるのだが、投機の対照としての美術品、

物があふれ、心が豊かにならないと目が向けられない現実。美術と社会との関係は数字として経済市場に現われて来るようだ。

美術は経済動向のバロメーターと言える。

昨年まであんなに新聞やTVでとりあげられていた「企業メセナ」（企業による文化支援）の話題も今年になって少なくなった。社会全体の経済の冷え込みを考えれば当然の事ではあるが、美術関係者としてちょっと淋しい気がする。

特に沖縄は復帰二〇周年目を迎え、これ